

主 題：教会とは：主の栄光のために

聖書箇所：コリント人への手紙第二 3章18節

この朝から一緒に考えてみたいものがあります。それは、「教会」についてです。残念ながら多くの教会では、あまり興味や関心がはられないような内容かもしれません。「神様の偉大さ、キリストの愛にこそ、私たちは目を向けなければいけない。」「教会？教会は二の次、知りたい人が知っていればいいのでは。」と知っている人もいます。そして、実際にその重要性が軽んじられてしまった結果、今では教会に関してさまざまな考え方や間違っただけの態度があふれています。神様と個人的な関係を持っていれば、自分には教会なんて必要ないと、教会を補足的な場所として考える人もいれば、教会を自分の必要を満たしてくれる場所だと考えて、まず自分が何を受けられるかを考える人もいます。そこに自分が好んでいる礼拝のスタイルがあるかどうか、自分の好みの音楽や働き、また自分と気の合う人がいるかどうか、もしそれらがあれば喜んで通い、もしそれらが失われれば、また自分の必要を満たしてくれる教会を探して転々と移っていく人もいます。でも、当然ながら教会は補足的な場所でも、自分の必要を満たす場所でもありません。ましてや私たちの中で二の次に扱われるような、ささいな、取るに足りないものでもありません。かつて神学者のひとり、ジョン・ストットという人物も次のように述べていました。「教会は神の永遠の目的のまさに中心にあります。それは神の後からの思いつきによるものでもなければ、歴史の偶然でもありません。」と。

教会の大切さは、いろいろな人たちによって語られています。しかし、それ以上にみことば自体も教会の重要性についていろいろなかたちで訴えています。思い返してみてください。たとえば「教会を建て上げる」と言われていたのはいったいだれだったでしょう？それはイエス様でした。マタイ16：18を見ると、こう書いています。「…わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。ハデスの門もそれには打ち勝てません。」と。教会というのはイエス様の所有物でした。教会の建設者はイエス様でした。そしてその建設者であるイエス様が教会のために何をなされたのかと言えば、それは、ご自身のいのちを喜んでささげることでした。エペソ5：25にもこのように書かれています。「夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。」、キリストは教会を愛されました。その愛はどのようなかたちで表されていたかと言うと、ご自身を教会のためにささげるというかたちで表されていたのです。

また、それだけではありません。みことば全体を見ていけば、主ご自身がご自分の血で買い取られた大切な教会というのは、いろいろな表現がなされていました。たとえば教会というのは、「キリストのからだ」として扱われていたり、「キリストの花嫁」として扱われていたり、また「神の家、神の家族」というふうに表示されていることもありました。ですから、間違いなく言えるのは、教会というのは、ただの建物ではありません。教会というのは、キリストがご自分のいのちをささげるほどの大切なものでした。キリストがご自分のいのちをささげて、罪から贖い出してくださった者たちの集まりでした。私もあなたも救われた者であれば、みな同じです。教会は、神様の恵みによって造り変えられた者たちの集まり、福音を信じた者たちの新しい生き方そのものでした。

だからこそ、私たちにとって教会について深く学び続けていくというのは、非常に重要なことになるのです。神様について学ぶことも大切です。キリストについて学ぶことも大切です。救いについて学ぶこと

も大切です。でも、私たちがキリストを心から愛そうとするのであれば、キリストが犠牲を払って愛した教会、その教会をも同じように愛そうとするということです。逆を言えば、もし教会に何も関心を払わないで、冷たい思いを抱いているなら、それは同じように、その人のキリストに対する愛というものも明らかにするものでした。宗教改革の先駆者ともなったヤン・フスという人物もこんなことばを残しています。「この世を旅する全ての巡礼者は、主であり、教会の花婿であるイエス・キリストを誠実に愛し、また彼の花嫁である教会自身をも愛さなければなりません。」と。

皆さん、今年度の終わりが近づいてきました。振り返ってみると、皆さんそれぞれが忠実に神様のために仕えてくださり、またそれぞれが互いのためにいろいろな働きをなしてくださいました。その働きの一つ一つに本当に感謝しています。来年度を迎えるにあたって、私たち自身がますます教会を愛する者として、キリストを愛する者として、聖書が教えている教会の姿というものをこの時に改めて考えてみたいと思います。もちろんこのテーマについて考え始めれば、もう山ほど考えられることはあります。ですから、今回は限定して、私たちが教会でこれからもさまざまな働きをなし続けていく上で、信仰者として、教会として心に留めておくべき基盤となる要素、四つの柱となるものを、聖書全体を通して見てみたいと思います。

早速一つ目の柱から見ますが、まずその前にきょうの中心となる聖書箇所、Ⅱコリント3：18をお読みします。

Ⅱコリント3：18

「私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」

●主の栄光のために生きる“教会”

さて、教会にあってさまざまな働きをなす上で、私たちが心に留めておくべき一つ目の柱、それは「主の栄光のために生きる」ということです。間違っても教会の中心というのは、私たちではありません。教会は常に神様が中心でした。私たちは、ただ神様をほめたたえる者であり、文字どおりすべてのことを通して主の栄光を現そうとするわけです。これは、多くの方にとっては当たり前のように聞こえるかもしれませんが、でも改めて考えてみてください。「主の栄光を現す」…これは教会に限った話でもありません。考えてみれば、神様が創造されたすべてのものは、最初から「主の栄光を現す」という目的のために造られたものでした。例えば、この地上の被造物さえ同じです。詩篇19：1で「天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる。」と言われていました。被造物も神様の栄光を語り告げるものとして造られました。でもこれは地上だけの話ではありません。天上においても同じでした。同じように神様によって造られた御使いたちも主の前にひれ伏して、その栄光をたたえることが言われているのです。詩篇29：1-2を見てみると、こう書いています。天使たちを指して「1 力ある者の子らよ。【主】に帰せよ。栄光と力とを【主】に帰せよ。2 御名の栄光を、【主】に帰せよ。聖なる飾り物を着けて【主】にひれ伏せ。」と。神様にささげるその礼拝、「主に栄光を帰す」ということ、それは地上であろうとも、天上であろうとも変わることはありませんでした。そして当然、これは私たち人間も同じなのです。私たち自身も、自分たちを造ってくださった創造主を素直に認めて、この方が受けるにふさわしい賛美や感謝をささげる者として生きていくことが、もともと求められていたのです。同じ詩篇96：3-4にもこう書いています。「3 主の栄光を国々の中で語り告げよ。その奇しいわざを、すべての国々の民の中で。4 まことに【主】は大いなる方、大いに賛美されるべき方。すべての神々にまさって恐れられる方だ。」と。ですから、みことばを

見てもそうです。この世界の創造の初めから、この地上の被造物も、天上のものも、私たちもみな、神様の栄光を現す者として造られました。

でも、もうご存じのとおり、悲しいことにこの神様の目的にすべての人は逆らったのです。本来栄光だけが値するお方に逆らって、それ以外のものに勝手に栄光を帰そうとする者になりました。神様だけのものであるその栄光を奪って、その栄光を自分自身のものにしようとしたのです。これこそがまさに、聖書が教えている「罪」というものでした。ローマ1：23にもこう書いています。「不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうもののかたちに似た物と代えてしまいました。」造られた方ではなくて、造られたものに仕えて、罪を犯したすべての人たちは、聖なる神様によってさばかれて当然でした。私たちはみな、生まれながらに御怒りを受けるべき存在だったのです。でも何よりも感謝なことは、そんな罪人にさえ神様は恵みを示してくださったということでした。十字架のみわざを通して、罪の赦しを備えてくださったということでした。キリストを信じる信仰によって私たちは新しく造り変えられたのです。

では、新しく造り変えられた者は、その後、何のために生きていこうとするのでしょうか？キリストにあって救われた者は、神様を感謝し、そして、もともと神様の栄光を現す目的で造られた者として、その栄光をたたえる者として歩んでいこうとするわけです。もちろんひとりひとりがその歩みを目指すだけではありません。同じように救い出された者たちの集まりである教会、その教会は一緒になってその目的を果たして歩んでいこうとするのです。救われた者はみな、神様の栄光を現すという本来の目的に忠実に従って、それを喜びとして、それに満足を見出し、それを何よりの楽しみとして歩んでいこうとするのです。みことばも繰り返しこの真理を教えていました。Iコリント6：19-20にこう書いています。「:19 あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。:20 あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現しなさい。」と。買い取られた者として、私たちは神の栄光を現そうとするのです。個人だけではりません。エペソ3：20-21にはこう書いていました。「:20 どうか、私たちのうちに働く力によって、私たちの願うところ、思うところのすべてを越えて豊かに施すことのできる方に、:21 教会により、またキリスト・イエスにより、栄光が、世々にわたって、とこしえまでありますように。アーメン。」。ですから私たちがなしていくことは何であれ、この教会にあってなされる聖書の学びであれ、祈りであれ、交わりや奉仕であれ、そのすべてが栄光のためになされていく必要がありました。私たちはあらゆる面において、あらゆる点において、主にかなった歩みをして、主を礼拝する者として生き、主を喜ばせる者として、私たちは主に似た者へと日々変わっていこうとするわけです。まさに、「食べるにも、飲むにも、何をするにも、主の栄光を現していく」（Iコリント10：31）、それが、私たちにとっての本来の目的であり、新しく造り変えられた者の存在意義でした。

ここまでは、多くの人たちがよく知っていることでしょう。でもちょっと立ち止まって考えてみてください。果たして、すべての面において私たちが主の栄光を現す者として生きていくというのは、具体的にどのようにして生きていくことなのでしょう？教会生活が長ければ、みことばをよく知っていけば、私たちはある意味口癖のように「私は主の栄光のためにすべてをなしていかないといけません」と言っているかもしれません。でも実際に、それはどのような姿を言うのでしょうか。そのことをきょうは最初に読んだIIコリント3：18から学んでみたいと思います。もちろん、ほかにもいろんな箇所から見て取ることができますけれども、パウロの記したこの箇所が、信仰者として、教会として、いつも主の栄光のために生きていくとはどういうことなのかを、私たちに教えてくれています。特にここには、主の栄光のために生

きていく者の「手段」と、そしてその手段をなしていく上でもたらされる「効果」の二つが描かれています。少し時間をとって考えてみましょう

〇一つ目の柱：主の栄光のために生きる

1. 手段：主の栄光を見続ける

まず、主の栄光のために生きていくための手段、それは、何よりも「主の栄光を見続ける」ことです。もう一度みことばをよく見ると、このように記されていました。「私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます」と。パウロはここで、心にかかっていた覆いを取り除けられた信仰者たちが、主と同じかたちへと変えられていくこと、キリストに似た者となっていくという話をしていたのです。その中で、それがどのようにしてなされると、口にしていたでしょう？パウロはこう言っていましたね。「鏡のように主の栄光を反映させながら」と。きょう皆さんに特に注目してほしいのが、この「鏡のように主の栄光を反映させながら」と訳されていることばです。この「鏡のように・・反映させながら」ということばには、実は「何かを反映させる」のほかに、もともと「何かを鏡に映すようにじっと見る、眺める」といった意味が含まれていました。つまり、これは、何かチラッと見るような様子ではありません。何かを慎重に見続けるような様子、何も見落とすことがないようにじっと眺めている、そんな様子を表していました。要するに「信仰者はみな、主の栄光をじっと見つめることを通して、目の前の鏡に映っているその主の姿を心の目で眺め続けることを通して、キリストに似た者へと変えられていく」というわけです。きょうはいろんなことを話しますが、もしすべてを忘れてもこれだけは覚えておいてください。私たちは主の栄光を見続けることを通して変えられていくのです。この「見続けること」がいかに大切かはほかの聖書箇所でも教えられていました。信仰者にとって欠かせないことでした。かつての信仰者たちも同じです。例えば、あのモーセの歩みに関してヘブル11：26-27にはこのように書いています。「：26 彼は、キリストのゆえに受けるそりを、エジプトの宝にまさる大きな富と思いました。彼は報いとして与えられるものから目を離さなかったのです。：27 信仰によって、彼は、王の怒りを恐れないで、エジプトを立ち去りました。目に見えない方を見るようにして、忍び通したからです。」と。モーセは報いとして与えられるものから目を離そうともしませんでした。「目に見えない方を見るように」し続けていました。モーセだけではりません。これに加えて、同じヘブル書の中で、著者はさまざまな苦しみに直面する信仰者に向かってこんな励ましを与えています。ヘブル12：1-2、こう書いています。「：1 こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか。」、この後「：2 信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。…」と。また、あのパウロも別の箇所でこのように述べていました。Ⅱコリント4：18を見てみると、「私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。」とされています。質問です、皆さん。主の栄光を現そうとして生きている信仰者にとって、主に似た者へと変わっていかうとする信仰者にとって、最も重要な鍵となるのはいったい何だったでしょう？それは、神様の栄光に満ちたその主の姿というものを見続けることでした。そこから目を逸らさずに、目を留め続けることでした。私たちは、自分たちが見ているものに影響を受け、見ているものによって変えられていきます。考えてみてください。私たちが主の栄光、主の愛や恵み、平和や義、そういったすばらしいものに満ちた主の姿をじっと見つめながら、眺めながら歩み続けていくとき、私たちはその主に似た者へと変えられていきます。どうしてか？それは、主の恵みによって救われた私たちが、救い主の偉大さを、救い主のすばらしさを目の当たりにすればするほ

ど、この救い主をさらに喜び、ほめたたえるようになるからです。そして、この方に対する喜びや賛美が増していけば増していくほど、私たちはこの方にのみ満足を見出そうとします。この方以外のものに、自分の喜びや満足を見出そうとしなくなるのです。

経験ありませんか？何かに没頭している時、何かの映像を集中して見ている時、ほかのものが目に入らなくなることがあります。周りがガヤガヤ騒がしかったとしても、私たちが見ているものによって心が囚われている時は、そういったものを忘れてしまうのです。キリストの栄光をじっと見て、その偉大さについても私たちの心を支配させ続けていくなら、私たちはキリストへの正しい畏れを抱くようになります。私たちがキリストの聖さにいつも心を支配させ続けるようになれば、私たちは罪への憎しみをますます抱くようになります。私たちがキリストの愛を見て、その愛にいつも心を支配させ続けるなら、キリストへの愛が私たちの上にもますます増し加わるようになり、そしてそのキリストの愛が増し加わっていくなら、私たちはキリストとそのことばに従順に従おうとする者になっていくのです。イエス様も言われていました。「私を愛するのであれば、私のみことばに従うでしょう」と。私たちは主の栄光を仰ぎ見ることを通して、主に目を留め続けることによって、主が愛しているものを愛して、主が憎んでいるものを憎む者へと変えられ、どんなときも主の栄光を現す者として成長し続けていくわけです。それが、私たちにとって最高の喜びでした。私たちが何かに没頭して見ている時はそれが楽しいからやるのです。それを喜んでいるときにやるのです。集中していなかったら、楽しくなかったら、私たちはいろんなものに目を向けるのです。でも、クリスチャンにとって主の栄光を見続けることは、私たちにとって最も喜びをもたらしてくれるものでした。神学者のジョン・オーウェンもこんなことばを著書の中で残しています。「キリストの栄光を絶えず思い巡らしながら生きようではありませんか。そうすれば、主からの力が私たちに注がれ、あらゆる墮落は修復され、正しい霊が内に新たにされ、あらゆる従順の務めに豊かに生きることができるでしょう。それは魂を喜び、満足、充足感を与えるのにふさわしいお方へと結びつけます。心がキリストとその栄光に満たされ、魂がキリストに深い愛情を抱くとき、霊的な弱さや霊的な病気の原因は取り除かれ、それらが入り込む余地すらなくなるのです。キリストとその栄光を絶えず仰ぎ見ることほど、私たちの魂を大いに励まし、力づけてくれるものはありません。」

そうだとすれば、どうでしょう？皆さん、果たして私たちは主の偉大さというものに、いつも心の目を向けているでしょうか？一日の生活の中で、私たちは主のあわれみ深さや忍耐深さにどれだけ思いを向け続けているでしょうか？主の聖さや正しさ、その完全さ、忠実さ、そういったものに、どれだけの時間私たちは目を向けようとしているでしょうか？主とその栄光にこそ、自分の喜びや満足、楽しみ、そういったものを見出しながら歩んでいこうとしているでしょうか？それとも、私たちは、何か別のものに心を向け続けていないでしょうか？一つ言えるのは、私たちは自分が見ているものに影響を受けます。自分が見ているものによって変えられていくということです。もし私たちの心がお金や物に向き続けているなら、次第にその心は貪欲さを持つようになるでしょうし、もし心が力や権力に向き続けているなら、次第にその心は自分の思い通りにしたいという欲求が出てくるでしょうし、もし私たちの心がだれかから認められることに向き続けているなら、それを手にできなければ、次第にその心には心配や不安、恐れが出てくるでしょうし、もし私たちの心が成功することに向き続けているなら、次第にその心は仕事や学業だけに支配されるようになってしまうかもしれません。私たちの心が神様以外のこの世の何かを見続けているなら、私たちはこの世の何か似た者へと変えられていきます。まるで子どもがずっとテレビを見ていて、テレビに出てきているその人のことば遣いを真似するかのようになり、私たちがこの世の何かを見続けているなら、本来なら主の姿を現すはずなのに、この世の考え方をし、この世の話し方をし、態度や行動において

も神様から離れた者になっていってしまうのです。だからこそ、どんなときも私たちひとりひとりにとっての模範であり、私たちの王であり、私たちの主であるそのキリストから目を離さない、ということが重要でした。主の栄光を現す者として歩み続けていくためには、主のすばらしいその栄光に満足を見出し、その主の栄光を楽しみ、その主の栄光に心を留め続けることが欠かせなかったわけです。

ここまで見ていくと、ある人は言うかもしれません。「よくわかりました。私たちは主の栄光を見ないといけないんですね。では具体的に、私たちはその主の栄光というものをどこで見ることができるのでしょうか？私たちはいつもどこを見続けたいいけないのでしょうか？私たちは、どこにその主の栄光というものを見出すことができるのでしょうか？」と問われたら、どう答えますか？もちろん、その一つはこの「聖書」です。神様はご自分のことばであるこの聖書を通して、ご自身の姿をはっきりと私たちに明らかにしてくださっていました。みことばこそ、主の栄光を明らかにしてくれる最も重要な源になるのです。「神様のことば」、そこに主の栄光が現されていました。

ちょっと思い返してみてください。あのモーセが以前、シナイ山にあって「どうかあなたの栄光を見せてください」と主に切実に求めたその時、神様はどのようにしてその求めに応答されていたでしょう？神様はただ単にその横を通り過ぎることはしませんでした。輝かしい力と名誉にあふれた雲をもってご自身の栄光を現されることもなされませんでした。何をなされたかと言うと、その時の光景が出エジプト34：6-7に描かれていました。「：6 【主】は彼の前を通り過ぎるとき、宣言された。「【主】、【主】は、あわれみ深く、情け深い神、怒るのにおそく、恵みとまことに富み、：7 恵みを千代も保ち、咎とそむきと罪を赦す者、罰すべき者は必ず罰して報いる者。父の咎は子に、子の子に、三代に、四代に。」と。神様がモーセの前を通り過ぎるその時、神様はただ無言でご自身の栄光を示すのではなく、「宣言され」ていました。ご自身の偉大さを、ご自身のその輝かしいご性質を、ことばでもって明らかにされていたのです。神様は「ことば」を用いられました。また、これは何もモーセの場合だけではありません。少し進んでサムエルの場合も同じでした。サムエルが預言者として神様によって任じられた出来事に関して、著者はこんなことばを記しています。Iサムエル3：21「【主】は再びシロで現れた。【主】のことばによって、【主】がご自身をシロでサムエルに現されたからである。」と。気づきますか？「神様のことば」と神様のご性質、栄光、偉大な姿、それは昔からずっと密接な関係にありました。神様はご自身を明らかにされるその一つ手段として「ことば」を大いに用い続けられていたのです。そしてそれは今もなお変わっていません。私たちが今こうして手にしているこの神様のことばである「聖書」も同じなのです。聖書は何よりも神様のことば。それを通して神様の輝かしい栄光を私たちに示してくれるものでした。

ですから創世記の初めからずっと読み進めていくと、私たちはすべての場面で神様の凄さを見たり、キリストの偉大さを見たり、神様のご計画の測り知れない知恵深さを見たり…私たちはそういったものによって心が踊るようになっていくのです。キリストのすばらしさを、ここに目の当たりにするのです。だからこそ、私たちが聖書を開く時、それは単に知識や情報を増やすのが目的にはなりません。日々の生活の中、デボーションの時間にみことばを読もうとするのも、このように日曜日に集まってきて聖書を学ぶのも、何も仕方なく与えられた責任としてこなしているものではありません。私たちが聖書を開くその時、そこに私たちの愛する主の姿を見るから、私たちは開くのです。もちろん、そこに自分たちの罪深さも見えます。でも、それにまさる神様の偉大さを、恵み深さを、救い主がどれほどの犠牲を払って私たちに救いを成し遂げてくださったのかを、そんな偉大なみわざをここで私たちは知るようになるのです。みことばを通して、私たちは輝かしい主の栄光を見続けることができます。そしてその主の栄光を見続けるとき、私たちはますます主の栄光を現す、主に似た者へと変えられていくのです。問われるのは、主の栄光を現

す者として生きていきたいと願っている私たちは、このみことばをどれだけ欠かせないものとして考えているか、ということです。みことばこそ、私たちにとって、宝です。今、牧会祈禱で詩篇119篇を読んでいます。詩篇の著者はみことばを深く愛していました。どうでしょう？ 私たちも同じようにみことばを愛しているでしょうか？ 主の栄光を知ることのできる、そんな神様のことばを愛しているのでしょうか？

でも、主の栄光が現されるのは、みことばだけではありません。「祈り」にしても同じでした。皆さん、「祈り」とは何でしょう？ 間違っても、それは私たちが難しさを覚えたとき、何かしらの必要を覚えたときにのみささげられるものではありません。「祈り」というのは、どんなときも私たちが主にささげる礼拝の場でした。朝起きてひとりでささげるような祈りも、食事の時に家族で揃ってささげるような祈りも、夜寝る前にささげるような祈りも、祈禱会にあってささげる祈りも、日曜にともに集まってささげるような祈りさえ、すべて同じです。私たちはみことばを通して神様を知っていきます。でも、それで止まるのではなく、私たちはささげる祈りを通して、知った神様の姿に目を留め続けようとするのです。

だからいろんな祈りがあります。たとえば神様が必要を与えてくださったとき、私たちは必要を与えてくださったものだけを見て、そのものだけを感謝するわけではありません。そのものを、恵みを与えてくださった恵み深い主を見上げて、その恵み深さに感謝するのも一つの祈りです。神様がどんなときも自分と変わらずにともにいてくださる誠実なお方なのだとすることを、みことばを通して知るとき、その信頼を、祈りを通して明らかにするのも、私たちの祈りの一つです。神様が弱者の声に耳を傾けてくださる、そんなあわれみ深いお方であることを知る時、私たちはその主に心から助けを求めて「どうかあわれみを示してください」と自分の重荷をゆだねるのも、それも一つの祈りです。どんなときも祈るその時、私たちはだれに祈っているのかをいつも覚えながら、さまざまな祈りの中で主の偉大なご性質に心を留めて、歩んでいこうとするのです。そのようにして私たちが祈りをささげるその時、主のいろんなご性質を覚えるからこそ、主の栄光をそこに見続けるからこそ、私たちは主の栄光を現す者として、主に似た者へと変えられていくというわけです。「みことば」と「祈り」、これまで見たこの二つが欠かせないというのは言うまでもないかもしれません。

でもこれらに加えてあえてもう一つ挙げるとすれば、私たちのもつ「兄弟姉妹との交わり、神の家族、教会としての交わり」というものも、主の栄光が明らかにされる場所でした。皆さん、私たちが交わりをするとき、そこに私たちは主の栄光も見ることができます。でもこれを聞くと、不思議に思う人もいるかもしれません。なぜかという、「交わり」と聞くと、私たちは、信仰の友人と近況を報告し合ったり、一緒に食事をするなど楽しい時間を過ごすことが交わりだと考えていたりするからです。それは別に完全に的外れではありません。ただ、それは私たちのもつ交わりの一部にしか過ぎないのです。聖書の描いている交わりというのは、もっと深いものでした。

それは前にも一緒に学びましたが、覚えていますか？ 信仰者がもつことのできる交わり、その交わりの基盤となるものは、常にどこにあったでしょう？ どうして信仰者は交わりをもてるのでしょうか？ その基盤は、いつも「キリスト」に基づくものでした。すべての信仰者は同じようにキリストによって救われました。同じようにキリストにあって一つに結びつけられた者たちでした。そして、そのようにして救われたすべての信仰者は、例外なくみな同じようにキリストに似た者へと変わろうとして、今歩んでいるのです。同じように主の栄光に心を留めて、目を留めて、主に喜ばれる者として変わろうとしているのです。つまり別のことばで言うなら、神の家族、教会の交わりというのは、主の姿を、主の栄光を現そうとする者たちの交わりでもありました。みな主の栄光を現したい、みな主の姿に似た者と変わりたいと思ってい

る者たちがもつ交わりだからこそ、その中にキリストを目にすることができるということです。アンソニー・ホエキマーという先生も著書の中でこんなことばを述べていました。「信仰者は、キリストに似た者となるのが何であるかを他のクリスチャンを観察することで学びます。私たちは、キリストの愛が仲間の信仰者の生活に反映されているのを見ます。彼らとの交わりを通して、キリストによって豊かにされ、キリストが語りかけておられることを聞くのです。信仰者は、仲間のクリスチャンの模範に励まされ、祈りに支えられ、愛に満ちた戒めに正され、その支えによって力づけられるのです。」と。よく考えてみてください。主の栄光を自分のこととして知った者、味わっている者は、ただ個人的にそれをひとりで楽しむものではありません。みことばを通して主の愛や慰めを味わった者、主に似た者へと変えられていくその者は、同じ目標を目指している互いの間においても、その味わった愛や慰めを示そうとします。だからこそ、兄弟姉妹との交わりの間には、キリストの姿が現れるものでした。ここはよく知っている箇所の一つかと思いますが、ヨハネ13：34-35でイエス様もこう言われています。「:34 ……互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。:35 もし互いの中に愛があるなら、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。」と。周りの人たちは、私たちの愛を知るのではありません。ほかの兄弟姉妹の愛を知るのでもありません。イエス様は「周りの人たちは、私たちが互いの中で共有しているその愛を知るようになるのです。そしてそれを通して、私たちが主の弟子であることすべての人が認めるようになります」と言われていたのです。私たちが互いに愛し合うとき、私たちが共有するものは、キリストです。キリストの愛を共有するのです。だから周りの人たちが見るとき、キリストがそこにおられることを見ます。私たちが互いの中で神様の慰めを共有するそのとき、人々が見るのは、私たちが示す慰めではありません。私たちが共有しているその慰めは、主の慰めです。それを通して主を知るのです。

そうだとすると、今だれかが私たちの交わりを見るとき、そこに何を見て取るでしょうか？私たちが兄弟姉妹と交わりをするその時、神様を知らない人と何ら変わらない表面的なものを見るでしょうか？それとも、人々は、互いに「イエス様に目を留めるように」と励まし合っている中に現れる主の姿を見るでしょうか？忘れてはいけないこと、それは、皆さん、主の栄光のために生きていく者にとって、その主の栄光に、その主の偉大な姿にどんな時も目を留め続けるということです。これがなければ、私たちは歩んでいくことができません。私たちが日々の生活の中でなすすべてのことも、日曜に教会に集ってともになすそのときも、どんなことであれ、主の栄光にのみ心を留めながら、私たちは一つ一つのことをなしていくことが大切でした。目を留め続けること、それこそが主の栄光のために生きる者に欠かせない手段だったのです。

2. 効果：主と同じ姿に内側から変えられる

そして最後に、手段に加えてもう一つだけ、その手段がもたらしてくれる効果というものを簡潔に見てみましょう。ただ、皆さん、もうこれまでに何度もこのメッセージを通して触れてきましたが、主の栄光を見続けると、その結果どうなるのでしょうか？その者は、主と同じかたちへと変えられていくのです。但し、その変化というのは外側からではなく、内側からのものでした。本当の霊的な変化は、内側から始まり、外側へともたらされるものになるわけです。どうしてそう言い切れるのでしょうか？それは、Ⅱコリント3：18に途中から書かれています。「鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」注目してほしいことばは、この「変えられて行きます」ということばです。このことばには、もともと「根本的な性格、品性、状態が、内側から変化すること」といった意味が含まれていました。また、この内側から変化

することを表す「変えられて行きます」ですが、同時に、読んで気づきませんでしたか？細かいことかもしれませんが、ここでは、同じかたちに姿を変えていきます、とは言わず、「変えられて行きます」と受け身が使われていました。ということは、「主の姿に変えられていく」というのは、それぞれが懸命に努力して、単純に何らかの正しい基準に自分自身を頑張っただけで沿わせていくという話ではないということです。正しい態度やふるまいを、単なるそれぞれの意志の強さによって身につけていくのではないということです。そうではなくて、それは本来私たちの心の奥底に、神様ご自身がもたらしてくださる内面的な変化でした。私たちが主の栄光を見続けるとき、ほかのだれでもない神様が、私たちの心を変えてくださるので、私たちの心に主が働いてくださり、主が、私たちの心に神様への深い愛や喜び、感謝などを生み出してくださるのです。だから、私たちが主を見続けるということは、信仰者にとって絶対に欠かせないことでした。

どのようにして私たちは変えられていくのでしょうか？私たちが主を見続けることを通して変えられていくのです。そして、主を見続けることを通して、私たちのうちに愛や喜びが増し加わってくれば、神様が私たちの心を変えて満足を与え続けてくださるのであれば、どんな犠牲を払ったとしても、私たちはますます主に喜んで仕えて、主のことばに従っていきたいという外側の変化をももたらされることになるのです。本当の変化は、神様が私たちのうちにもたらしてくれる、内側から、心からあふれ出るものでした。

そしてね、皆さん、この事実は私たちにとって大きな慰めや希望にもなるのです。なぜかと言うと、もしも仮に、私たちが主に似た者へと変わっていくということ、主の栄光を現していくということが、私たちの努力で主を見続けることにだけかかってくるようなものだったとしたら、そんなことは私たちには絶対に不可能でした。私たちの努力によって自分で懸命に外側の汚れを落とし続けていくことによるのなら、私たちはそんなことはできませんでした。そして、間違いなく自分のうちにいつまでも見られる罪深さにだんだんと打ちのめされるようになり、なかなか変わる事のない自分の心の汚さ、弱さ、愚かさを目の当たりにし続けて、失意やあきらめを抱いてしまうでしょう。大きな試練や葛藤を味わうその中で、心が挫けてしまうかもしれません。でも、「そうではない。たとえ私たち自身には、到底変えられないと思えるようなかたくなさであったとしても、神様がそれを変えます。どれだけ長い間持っていた汚いものであったとしても、神様にはそれを変えことができます」と言われているのです。神様には、その汚れた心を変える力があるということです。そして、神様が、私たちのすべての源である心を変えられるのであれば、私たちの考えも、思いも、行動も、すべてが必然的に変えられるようになっていきます。

でも、ここに鍵があるのです。私たちが主の栄光を現す者として、また神様に変えられて歩んでいくための鍵。それは、私たちが「主の栄光を見続ける」ことでした。私たちはどんなときもみことばを通して、キリストとその偉大さに心を留め続けて、私たちが祈りを通してキリストへの感謝や信頼を言い表し続けて、そして、私たちが交わりを通して互いにキリストに似た者となっていくことを励まし合いながら、キリストの栄光をこの世にあってともに現そうとしていくわけです。それが、信仰者にとっての唯一の歩み方でした。それこそが教会の姿であり、教会にとって欠かすことのできない一つの柱だったのです。

残りの三つについては、また来週から見ていきます。でも、ぜひ忘れないでください。私たちは「主の栄光を見続けることによって、主によって変えられていく」ということです。ただ主に栄光を帰す者として、この主を思い続けながら、すべての面で主の栄光を現す者として、今週もともに歩んでいきましょう。